

カンカンカン。

鐘が鳴った。ラスト一周の合図だらうか。

僕のすぐ前にはチビとひょろいのがいて、更にその一メートル程先にリズミカルにトラックを走る坊主頭が見えていた。「よーすけファイトー！」黄色い声援が無意識に耳に入つてきてしまつ。羨ましい限りだ。

カーブを抑え気味で走り、直線に入つたところですぐにチビを抜いた。ひょろいやつの不規則な呼吸が聞こえる。ゴール地点では、中村先生がストップウォッチを握りしめながら何か大聲で叫んでいた。相変わらずドイツ代表の黒いウインドブレーカーを着て。カーブに差し掛かるといひよろいのが急にスピードを落とし、そのせいだ坊主頭との差が広がつてしまつたように思われた。後方からはまた、別の足音が迫る。曲線で抜かすのは何だか勿体ないよつた気がし

たけど、イライラするくらい遅いから一瞬で抜き去つてやつた。最後の直線に入つたといひで、坊主頭は未だ僕の三メートル前。

百メートル走なら、お前には絶対負けないぜ。突然の追い風にのつて、僕はラスト五十メートルから急激にスピードを上げていつた。自分でも驚くくらいどんどん加速していく。芝のフィールドでは、高飛びに失敗した誰かがマットの上で膝を抱えていた。残り二十メートル、差は一メートルまで縮まり、上下に激しく動く坊主頭の肩が目の前にある。残り十メートル、手を伸ばせば届きそうだ。毛穴から吹き出た大量の汗が風に揚がれていく。残り五メートルで横に並んだ。坊主頭の右腕が僕の左腕に少しだけ触れた。残り二メートル、坊主頭が視界から消えた。僕はもう、自分が息をしているのかどうかも分からなかつた。最後の一歩を大きく踏み出

「順平、お疲れ。大丈夫か？！」

太陽の代わりにドイツの国旗が頭上に現れ

た。

「大丈夫ですけどかなり疲れました。」

「だろうな。俺もまさかトップでゴールするとは思つてなかつたからな。ほれ、差し入れだ。」

僕はふらふらと立ち上がり、目眩がするのも構いなしに火傷しそうなくらいキンキンに冷えたボカリスウェットを一気に飲み干した。息が続かなくなつて、ペットボトルを口から離した後で少しむせた。

その日、中村先生は晩御飯にお寿司をご馳走してくれた。まあ、回つてやつたけど。「あれなあ、県北地区の大会つて知つてたか？お前、県大会出てみるか？」
「いや、いいつす」
またあの体育着で走るなんて、本気で勘弁して欲しい。あの中途半端な緑色はどうにかしてくれ。

三週間後、僕は県大会の決勝レースで七人中

五位でゴールした。せめてサッカーのゲームシ

ヤツで、と中村先生に頼んでみたけどやつぱり駄目だった。

『県大会での五位』それは中学生の僕にとっては何の価値もなかつた。嬉しくもなかつたし、悔しくもなかつた。それがすこいのか全然すご

野球部員達の掛け声に負けじとマネージャーが声を張る。入りの三百にしてはいつもよりだいぶ遅い気がした。一昨日の疲れがまだ残つていて、と言えばいい訳になつたかもしれないけ

たけど、イライラするくらい遅いから一瞬で抜き去つてやつた。最後の直線に入つたといひで、坊主頭は未だ僕の三メートル前。

突然の追い風にのつて、僕はラスト五十メートル走なら、お前には絶対負けないぜ。百メートル走なら、お前には絶対負けないぜ。突然の追い風にのつて、僕はラスト五十メートルから急激にスピードを上げていつた。自分でも驚くくらいどんどん加速していく。芝のフィールドでは、高飛びに失敗した誰かがマットの上で膝を抱えていた。残り二十メートル、差は一メートルまで縮まり、上下に激しく動く坊主頭の肩が目の前にある。残り十メートル、手を伸ばせば届きそうだ。毛穴から吹き出た大量の汗が風に揚がれていく。残り五メートルで横に並んだ。坊主頭の右腕が僕の左腕に少しだけ触れた。残り二メートル、坊主頭が視界から消えた。僕はもう、自分が息をしているのかどうかも分からなかつた。最後の一歩を大きく踏み出た。乱れた呼吸を整え、両手両足を大きくバタント下ろすのと同時に太陽を見た。眩しすぎる日差しに目を細め、太陽の光に手をかざしてみる。恐ろしくなるくらいの晴天だつた。雲一つない真っ青な空が僕を包んでいた。膝を曲げて両手を頭の後ろで組み、もう一度太陽を見上げた。十五年間で、間違いなく一番の青空だつた。

した僕は、坊主頭の呼吸を完全に背中に受けた。チビが三位で四位はサラサラベアーの女みたいにやつ。ひょろいのは結局五位だつた。両膝に手を置き、前屈みになつてそこまで見届けた僕はよろよろと鮮やかな緑色に歩み寄つていつつ、小さなレールのようなものに躊躇つて芝に倒れ込み、その拍子に打つた右肩を痛くもないのにさすりながら、僕は目を閉じて仰向けになつた。乱れた呼吸を整え、両手両足を大きくバタント下ろすのと同時に太陽を見た。眩しすぎる日差しに目を細め、太陽の光に手をかざしてみる。恐ろしくなるくらいの晴天だつた。雲一つない真っ青な空が僕を包んでいた。膝を曲げて両手を頭の後ろで組み、もう一度太陽を見上げた。十五年間で、間違いなく一番の青空だつた。

くないのか、どうでもいいほど興味がなかつた。それなのにその半年後の二月、偏差値六十二の高校に奇跡的に面接で受かつた僕は、なげなしの一万円でミズノのランニングショーズを買つた。朝は五時に起きてまだ暗いうちから身体を温め、夜は倒れそうになるまで何度も同じ景色を眺めながら走つた。四月に入ると両手両足に一キロの重りを付けても五キロ走るのに十五分程しかかからなくなつていたけど、それが速いのか遅いのか僕には分からなかつたし、その十五分というのも正確に測つたタイムではなかつた。ただ、僕は倒れそになるまで走ることが楽しくて楽しくてたまらなかつた。喉の奥が締め付けられ、ふくらはぎが震え、太腿が熱くなり、汗が頬から首を伝つて胸や背中をつーつとかけおりる。身体中の神経が僕に走るよう訴えていた。

そして、僕自身も走らずにはいられなかつた。

その日から、僕は自分のタイムをノートに記録するようになつた。川島先生から寄付してもらつたストップウォッチのおかげで朝と夜のランニングのタイムも正確に測ることが出来るようになり、とにかく走つた距離とタイムは全て記録し、その日のベストタイムには水色の蛍光

ペンで印を付けた。自己ベストが出ると、僕はそれをピンク色でぬつた。毎日持ち歩くせいで表紙の小さな汚れは日に日に増殖し、裏の厚紙はふやけて弱々しくなっていった。

五月の第三週の土日に県大会が行われた。確かに川崎の等々力競技場でだつたと思つ。

結果から先に言おう。その日、僕は地区大会と同じようなレース展開で、一位に五秒近い差をつけて優勝した。ちなみにそれは十五百の方の話で、八百はというと、一応関東大会出場枠ギリギリに食い込んだものの、散々なレースだったでのそこは深く突っ込まないで欲しい。本当にこの本を読んでいる人の中に、あのレースを見た人間がないことを切に願つ。本当に地区大会から県大会までは本当にあつという間だつたけれど、県大会が終わると次の関東大會まで一ヶ月以上調整の期間があつた。顧問の先生に休みを貰つた僕は少しだけ、そう、ほんの一日前だけ、走るのをやめてみた。その時僕は、煙草を止められない人の気持ちが痛いくらい分かつた気がした。椅子に腰掛けた僕の両足には常に力が入つていて、膝に手を置いていないと超高速の足踏みをし始めてしまいかねなかつた。学校の長い廊下を無意味に何度も往復したり、自宅のリビングのソファーやテーブルの

周りを八の字に歩いてみたり、自分で言うのも

なんだが頭が壊れた人みたいだつた。体力を使つてないから当然のように食欲もなく、深夜

の二時を過ぎても睡魔はやつて来ず、暇をもて

あますような形になつてしまつたので、ベッドの小さく軋む音も気にせず最近ご無沙汰だつた彼を元気づけてやつた。彼女とは三回戦までしか試したことがなかつた僕は、個人戦では四回戦まで勝ち進み、終わつてみると以上の以上に疲れていた。マスターベーションの後の脱力感は何かをやり遂げた時の達成感に似ていて、それなのに同時に空虚感にも襲われる。走り終わつた後と同じだ、と思った。そして僕は何故か、焦燥の念に駆られていた。

余命一日を宣告された繁殖期の雄鳥みたいに、(腰の代わりに)手を動かし続けた。一人で汗をかく運動をした後で僕はもう『明日』になつてることに気付き、三時の涼しく暗い夜に風を殴りに行った。気のせいか空は少しずつ朝を告げ、新聞配達のバイクの音が遠くに聞こえていた。

その日の夕方、軽めのメニューを早々に終わらせて、千五百を計つてみると自己ベストより三秒以上も早いタイムが出た。四分一秒五〇。『端山、お前休みの間秘密の特訓でもしたの

に、』腰の代わりに手を動かし続けた。

一人で汗をかく運動をした後で僕はもう『明日』になつてることに気付き、三時の涼しく暗い夜に風を殴りに行った。気のせいか空は少しずつ朝を告げ、新聞配達のバイクの音が遠くに聞こえていた。

余命一日を宣告された繁殖期の雄鳥みたいに、(腰の代わりに)手を動かし続けた。一人で汗をかく運動をした後で僕はもう『明日』になつてることに気付き、三時の涼しく暗い夜に風を殴りに行った。気のせいか空は少しずつ朝を告げ、新聞配達のバイクの音が遠くに聞こえていた。

その日の夕方、軽めのメニューを早々に終わらせて、千五百を計つてみると自己ベストより三秒以上も早いタイムが出た。四分一秒五〇。

『端山、お前休みの間秘密の特訓でもしたの

かされないとか。噂ではハンド部の誰かに片思いい中らしいが、牧野さんに好きだなんていわれたら、僕なら間違いなく間髪要れずにイエスだ。男子千五百メートル決勝。「よーい」みんなの腰が少しだけ低くなる。

パン。ピストルの音。

一斉に飛び出した。いつものことだが、皆百メートル走並みの速さでスタートするもんだから、序盤抑えて走ろうと思つても知らず知らずにスピードを上げてしまう。どの学校か分からなければ、レース前から目立つていたパンチパーマでやたら手足の長い黒人を先頭に、水泳選手と見間違うくらいの肩幅の広い茶髪、その後ろを走るくすれかかったモヒカンに笑いそうになりながら、カーブを曲がりきつたところで僕は四番手につけていた。

千メートルを過ぎて皆が疲れ始めたところで、一気にスピードを上げて抜いていく、僕のやり方はいつも同じだつた。二つ目のカーブで後ろの方をチラツと見た。筋肉の塊みたいなやつが一人、もう既に遅れ始めていて、僕の後ろには二、三メートル開けて三人がほぼ間隔をあけず続いていた。スタート地点を通り過ぎてまた直線に入る。タイムはどうだろ。トップを走る黒人のペースが速いのか、他のメンバーが全體的に抑え気味で走つているのか、それともた

か?』

川嶋先生に言われて、半日前のことと思い出して一人でニヤけてしまつた。

「いや、特に、何も。」

次の日、競技場で八百と千五百を計るとどうらも自己ベストが出た。八百はとうとう二分を切り、千五百も三分三秒台まで縮まつていた。

「あいつの成長ぶりには恐怖を覚えるよ。タムが縮まる度、世界のどつかでとんでもない不幸が起こつてゐんじやないかって思うくらいだ」

川嶋先生はそんなことを言つていたらしい。僕だつて怖かつた。何の前触れもなく、突然地獄に落ちてしまいそうで。気付いたら、僕一人を遣して、世界が滅びてしまいそうで。

「今日千五百三本な。十分ずつおいて、最後の終わつたら出来るだけ休憩入れずに十キロジョグな。」

最近専ら千五百しか計つていないような気がする。まあ、この前のレース展開を考えれば八百でのインターハイはないと思つたほうがいいかもれない。身体に千五百のペース配分がインプットされてしまつて、八百で走り終えるつもりでもいつも速すぎたり遅すぎたりして最後の百メートルがひどいことになる。

「千五百三本目。よーい、はい。」

十分置きで千五百三本は結構しんどい。この後に十キロジョグが待つてるとと思うと、もう、本当に家に帰つてしまつたくなる。

「三百メートル、四十三、四十四、四十

五・・・」

少し早いかもしない。ああ、そういうえば今日は奇数の日だから僕が風呂掃除の当番だ。多分家に着くのは七時頃だから、きっと仕事から帰つてきた母親が、『機嫌ナナメで夕飯の支度をしているのだろう。

「六百メートル、一分三十一、三十二、三十

三・・・」

のろのろと転がってきたソフトボールに、何か似顔絵のようなものが書いてあるのが見えた。よける必要もなかつたが、前髪を押さえながら走つてきた一年のソフト部員に『すいません』と頭を下げられた。

「九百メートル、二分二十一、二十二、二十

三・・・」

男子ハンドボール部のマネージャーが水飲み場で給水ボトルを洗つてゐる。入学当初から学年一の美人と謳われてゐる、一組の牧野さんだ。

「千一百、三分十、十一、十二・・・」

たつた三ヶ月からそちらで五人に告白されたと

だ単に僕の体内時計が狂っているのか……。

タイムが気になる。先輩やマネージャー達が「ファイト」と叫んでいる前を通り過ぎ、幅跳びの選手達の横を走り抜けた。階段状になつた客席の方では、一組の男女が仲良さそうに何かを眺めて笑つている。端には深く被つた帽子のつばを両手でつまみながら足を組み替える人が見えた。

八百メートルを過ぎた。あと残り半分。スタート地点の近くでは槍投げの選手達が集まつて点呼を受けていた。たいていがタオルでフォームの確認やイメージトレーニングを行う。タオルなんかで練習になるのか? というのが僕の本音だけれど。後ろを振り返るとさつきまですぐ後ろを走っていた三人が僕から五メートルほど離れたところを走っていた。少しだけスピードを上げてカーブを曲がりながら、残り五百メートルの地点で前の三人を抜かそうか考えていた。さつきの仲良しカッフルは相変わらず楽しそうにいちゃいちゃしている。その時に初めてゴール地点に立つている川嶋先生に気付いた僕は、右手の人差し指と中指で左手の手首をぽんぽんと叩いた。

タイムは?

先生が右手の親指を立てた。

もつとスピードを上げる。

カンカンカン。鐘が鳴る。ゴール地点を通り過ぎるまでに前を走るモヒカンやろうに並んだ。完全に元気のなくなつたモヒカンを横目で見ながら、カーブを曲がつたところで余裕の雰囲気をかもし出しながら前に立つた。モヒカンやろうを抜かしたのに、先頭の黒人と距離は一向に縮まつていらじりを感じられなかつた。

皆のタイムが一番落ちるラスト一周の最初の直線。広すぎる肩幅ときれいな小麦色を眺めながら一気に抜こうと思ったのに、向こうも抜かされまいとスピードを上げる。一度スピードを落とし、そいつがつられてスピードを落としたところでスピードをかけた。抜かせー。先輩の叫声が聞こえる。もちろん。腕をリラックスしてぶらぶら振りながら、スママーもどきの右腕すれすれを駆け抜けた。カーブに入つてしまえば向こうも無理に抜き返そうとは思わないだろ。残り二百メートル。充分抜かせる距離だ。だけど前を走る細い背中は、今までにないくらい果てしなく遠く感じられた。腕を戻して両膝にぐつと力を入れる。いつも以上にかかとに体重がのつてるのが分かるくらい、僕は必死で脚を回転させた。もう呼吸はぼろぼろだつた。最後の直線に入つて差は二メートルあるかない

か。覚悟を決めて少しだけ右にすれた僕は、中学三年の時のレースを思い出していた。最後で坊主頭を置き去りにした、あのレースを。だけどいくらスピードを上げても黒人はどんどん進んでいく。まるで背中に羽がついているみたいだ。ハアハアハア。ひどい呼吸だ。待つてくれ。こける。こけちまえ。お前疲れてないのか? 賴む。もう走れないだろ? 限界だろ? こんなところで負けていられないんだ。頼む。一番に、あの白いテープを切らせててくれ。残りがある三十メートル位だろうか。突然、信じられないほど身体が軽くなつた。いける。抜かせる。勝てる。競技場中に聞こえてしまった呼吸に、黒人が首を振つて僕を見る。僕は真っ直ぐ伸びた白いテープだけを見て、リアル鬼ごっこをしているような気持ちで、背後に人食い狼が迫つてきてるような気持ちで、一心不乱に足を前に出す。並んだか。僕の方が半歩後ろか。苦しい。死にそうだ。ダメだ。追い越せない。

一位でゴールしたその黒人は、テープを払つて少しうつスピードを落としながらクールダウンに入った。何てやつだ。僕はゴールの線を越えた右足に全体重をのせた。何故か左足だけが痙攣していく。僕は歩くことが出来なくてその場に座り込んだ。赤茶色のターパンが、いい具

合に熱くなつてゐる。川嶋先生がタオルと飲み物を持って走ってきた。喘息みたいな呼吸は一向に落ち着かない。関東大会でこれがよ……。

「へイ」

黒くて細い一本の脚が目に入った。顔を上げると太陽よりも大きい手が伸びてきた。大量の汗のせいで天然のパンチパーマがあかしなことになっている。彼の右手に身をゆだね、僕は頬りない両脚でゆっくりと立ち上がつた。

「アリガトゴザマス」

心の底から走ることを楽しんでいる顔だつた。全く、何てやつだ。

「只今の結果をお知らせします。一位、タゼブ君。三分五十七秒八三。二位、端山君。三分五十八秒六〇。三位、内山君。四分一秒〇一・・・」

「奇跡だな」

川嶋先生が言つた。

「実力、つすよ。」

言って舌を噛んだ。

インターhai。入部当初から川嶋先生に散々言われてきた言葉だつたから、インターhaiに出来るのが物凄く普通というか、何だか当たり前のこのどのようにも思われた。あまり実感が湧かなかつたのかもしれない。上手く行き過ぎて、

思い通りにことが運んで、スリルを楽しむ暇もなく、スランプに悩む間もなく、あつという間だつたから。学校の南門のすぐ横には、『一年三組 端山順平 一五〇〇メートル 全国高校総体出場』と、大袈裟に大きな横断幕がかけられた。知らないうちに接点のない先輩や関わりのない先生からも名前と顔を覚えられた僕は、廊下で時々全く知らない人から「頑張つてください」と言わされることがあり、それから授業中にはやたらと指されるようになつた。

インターhaiまで一週間を切つた。

明日からはだいぶ軽くするからな。川嶋先生にそう言われた僕の今日のメニューは五百メートルダッシュ 千メートルジョグ×五回を三セットと十五分の休憩を挟んだ後、一キロ五分ペースで一時間のジョグ。炎天下、僕は氷水に浸けたスポンジを顔や胸になすりつけることどうにか体温が急激に上昇するのを防いでいた。激しく上下する肩から伸びる両腕はもはや重りのようにも感じられ、だらしなくぶらぶらと揺れているだけのそれらは、ともすれば僕の腹に当たつて僕の走りを妨害してしまいそうだつた。一時間のジョギングの後で三十分間置いて千五百のタイムを一本だけ計つてもらい、

実際僕はどこまでやれるか検討もつかなくて、だけど来年再来年があると言つてもやつぱり出来る」となら結果を残したいと思つていた。僕は鬼のようなメニューをこなした後、いつものように同じクラスでサッカー部の杉山陽の自転車の後ろに乗つけてもらい駅まで向かつた。

「君達、一人乗り駄目ですよ。降りなさい。」

僕達の高校の回りは大きい道路が多いせいが、やたら巡回中のパトカーと遭遇する率が高い。だけどそれもやっぱりいつものことで、僕らは声を揃えて「はーい」と答へ、その十秒後にはまた陽の後ろに跨るのだ。

駅前の大好きな交差点に差し掛かつた時、前方の信号は青だつた。車道を走つていた時速五十キロくらいの原付きが左から来て、陽の目の前でほぼスピードを落とさないまま右に曲がつた。年季の入つた陽の黒いママチャリは、下り坂で出すぎたスピードを一気に落とせないほどブレーキが緩んでいて、後ろに六十キロの荷物を乗せていた陽はその原付きをよけ切れなかつ

たんだ。陽はブレーキをかけながら思いつきりハンドルを右に切り、僕らは揃って右足を地面につけた。同時にロケット花火みたいな勢いで突っ込んできたその原付きの前輪は、真っ直ぐ僕の左足を射止めた。自転車のタイヤの真ん中にあつた六角形の小さなねじが、まるで何かのマイクロチップみたいに僕のふくらはぎに埋め込まれていくのが分かつた。左足の膝から下が変な方向に曲がった気がした。僕らは自転車ごと飛ばされ、その瞬間「死んだな」と思った僕は痛みさえも感じていなかつた。その後のこと

は分からない。

田が覚めると僕は病院のベッドに横たわっていた。テレビのアナウンサーが今日で八月も終わるのですが、と言つた。窓の向こうでは木の葉が騒がしく歌を歌い、蝉は悲しげに鳴き声を響かせている。

ゆつくりと、本当にゆつくりと身体を起こした僕はおそるおそる左手で拳を作つてみた。左手の五本の指は、掌につく前に変な形をしたまま止まつた。筋肉の緩んだ手でタオルケットをはぎ、立とうとしたところであることに気付いた。僕の左足は、膝から下がなくなつていた。そして、身体の一部がなくなつてゐるというのに少しも違和感がない。あるはずの足首に向かつて、そこにあつた飴玉を投げてみた。小さい頃よく舐めていたいちごミルクの包み紙は、少しだけ転がつて布の下隠れていつた。

僕は静かにベッドに倒れ込み、そのまま目を閉じた。

田尻から頬を伝つた涙が、こめかみを掠り、

当の自分みたいなものを誰かに気付いて欲しくて、だけどやっぱり捨て身にはなれて、それであやつて走ることだけに夢中になつていただ。

耳の穴の中へ入つていつた。
右目の視界だけが、何だかぼやけていた。
そのぼやけた右目には、あの藍色のノートが

やれていた。

藍色の表紙をめくれば、鉛色をした小学生みたいに下手くそな字が右斜め上に少しずつ掠れているはずだ。だけどそこに並んだいくつもの同じような数列を、僕は今、心の底から見たくないと思つ。

神様、教えてくれ。
僕はこれからどうすればいい?
自ら命を絶つ権利なんて無いかもしれない。
だけどそれなら、こんな身体で生き続ける義務だつてないだろ??

僕はこれからどうすればいい?
自ら命を絶つ権利なんて無いかもしれない。
だけどそれなら、こんな身体で生き続ける義務だつてないだろ??